〈看護学科〉

基礎看護学

教　授：田中　幸子　　基礎看護学
准教授：菊池麻由美　　基礎看護学
講　師：羽入千悦子　　基礎看護学
講　師：佐竹　澄子　　基礎看護学
講　師：青木　紀子　　基礎看護学

教育・研究概要

Ⅰ．教育

1．基礎看護学領域では看護学生として初めて行う臨床実習である「基礎看護学実習」において，看護職のシャドーイングと多職種連携教育の一環として，医師，薬剤師，検査技師等の医療専門職者のシャドーイングを昨年度に引き続き行った。

2．看護援助についての研究では，排泄および安楽，聴覚への音刺激に焦点を当てた準実験的デザインの研究を行っている。また，療養介護病棟でのフィールドワークに基づく運動機能障害患者への援助行為についての記述的研究および新たな看護診断ラベルの同定に向けた看護診断に関する研究にも続けて取り組んでいる。

Ⅱ．研究

1．看護職者の健康的な働き方を分析すること目的に病院で就労する看護職者を対象に，「看護職者の Healthy Work Environment 特性分析」研究を行っている。研究成果は，TNMC & WANDS International Nursing Conference 2017（Bangkok）で発表した。

2．看護援助技術については，フィジカルアセスメント技術におけるシミュレーション教育の方法，生体反応から捉える準実験的デザインの研究として，床上排泄に適した体位の検討や安楽を促す音刺激の検討を行っている。

3．看護学生の国際的視野の育成にむけて，看護系大学における国際看護に関連した科目の現状と課題についての研究を行っている。研究成果は，TNMC & WANDS International Nursing Conference 2017（Bangkok）で発表した。

「点検・評価」

1．教育

1）今回の 2017 年度カリキュラムから名称を「基礎看護学実習」と改め，昨年同様の内容で継続して実施している。他の医療専門職へのシャドーイング実習は，昨年度と同様に看護実践への学びに加え，他の医療専門職者の役割と活動を知ることで，より自らの看護職への意識が高まるとともに，多職種連携の視点を持つことにつながっていたと考えられる。

2）看護実践能力の育成に向けて精力的に教育方法の検討を行った。特に，フィジカルアセスメント教育については研究結果からも一定程度の効果が確認できている。今後，臨地実習での実践を見据え，確実な技術習得だけでなく，臨床状況に応じた技術の実践ができるようシミュレーション教育を取り入れて教授方法をさらに検討していきたい。また，日常生活の援助に関連した技術の習得にむけて，リアリティのある教授方法の工夫や e-ラーニングを用いた学習支援などを工夫していきたい。

2．研究

研究活動については，領域構成員がそれぞれに研究テーマをもって継続して研究を行っている。

研　究　業　績

Ⅰ．原著論文

1）渡邉奈穂．看護師の「勤務表文化」の実態．日看管理会誌 2017；21(1)：7-16.

Ⅲ．学会発表

1）Tanaka S. Ogata Y[1], Nagano M, Katsuyama K (Yokohama City Univ), Yumoto Y[1]（[1] Tokyo Med Dent Univ). Environmental factors of Japanese nurses to continue working healthily. TNMC & WANS International Nursing Research Conference 2017. Bangkok, Oct.

2）遠山寛子，石川純子，佐竹澄子，高橋　衣，梶井文子，北　素子．（ポスター）主体的学修態度を育てるコンピューター試験の在り方の評価（第 1 報）－試験準備周知方法の変化－．日本看護学教育学会第 27 回学術集会．宜野湾，8 月．［日看教会誌 2017；27：139］

3）石川純子，佐竹澄子，遠山寛子，高橋　衣，梶井文

子，望月留加，北　素子．（ポスター）主体的学修態度を育てるコンピューター試験の在り方の評価（第２報）－学年別平均得点率と知識定着度の分析－．日本看護学教育学会第27回学術集会．宜野湾，８月．［日看教会誌 2017；27：139］

4）酒井宏美，武田希帆子，大久保暢子，軽部奈弥子，小林由紀恵，佐竹澄子，百田武司，杉山理恵，丸山理恵．急性期失語症患者をもつ家族の気持ちの様相－文献検討の結果から－．第５回日本ニューロサイエンス看護学会学術集会．廿日市，１月．［第５回日本ニューロサイエンス看護学会学術集会抄録集 2018；11］

5）渡邉奈穂，井上真智子．未病に取り組む多世代共創社会に向けた多世代演劇ワークショップ．第８回日本プライマリケア連合学会学術大会．高松，５月．

6）渡邉奈穂，岡崎研太郎，蓮行，井上真智子．持続可能な多世代コミュニティづくりに向けた多世代演劇ワークショップの参加者の体験．第９回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会．京都，９月．［日ヘルスコミュニケーション会抄集 2017；９回：15］

7）Takatsuka A, Tanaka S. Current state of education in “international nursing” at Japanese nursing universities and colleges. TNMC & WANS International Nursing Research Conference 2017. Bangkok, Oct.

8）Aoki N. Acquisition of the nursing skill of elimination in intramural exercise and on-site practice for nursing students. TNMC & WANS International Nursing Research Conference 2017. Bangkok, Oct.

Ⅳ．著　　書

1）田中幸子．第３部：集団レベルの組織論　Ⅷ．人事制度　６．ワークライフバランス支援，７．ダイバーシティ，第４部：経営管理　ⅩⅢ．看護と法．久保真人（立命館大），米本倉基（藤田保健衛生大），志田京子（大阪府立大），勝山貴美子（横浜市立大）編著．よくわかる看護組織論．京都：ミネルヴァ書房，2017．p.136-8, 216-26.

2）ライダー島崎玲子[1)]，田中幸子．Chapter1：看護の歴史．ライダー島崎玲子[1)]（[1] 青森県立保健大），小山敦代（聖泉大），田中幸子編著．看護学概論：看護追及へのアプローチ．第４版．東京：医歯薬出版，2018．p.11-22.

3）田中幸子．Chapter3：看護実践と看護が活動の場　８．災害看護　５）災害看護の歴史，Chapter4：看護と法律．ライダー島崎玲子（青森県立保健大），小山敦代（聖泉大），田中幸子編著．看護学概論：看護追及へのアプローチ．第４版．東京：医歯薬出版，2018．p.78-80，87-101.

4）田中幸子：第８章：リーダーシップ，第９章：看護師のキャリア開発．大島弓子（豊橋創造大），飯島佐知子（順天堂大）編著．看護管理と医療安全．改訂版．東京：放送大学教育振興会，2018，p.122-68,

5）田中幸子．第Ⅲ章：看護サービス管理の周辺　２．現代法制度と看護管理－医療提供関連法規．手島　恵（千葉大），藤本幸三（東北文化学園大）編．看護管理学：自律し協働する専門職の看護マネジメントスキル．改訂第２版．東京，南江堂，2018．p.230-42.

看護管理学

教　授：永野みどり　　看護管理学，創傷ケア，情報科学

教育・研究概要

Ⅰ．教育

学部の教育として，前期１年生の必修科目「情報科学」90分×14回，前期３年生の必修科目「看護マネジメント」90分×14回，後期２年生の必修科目「看護情報管理学」90分×14回は，専任教授の永野みどりが単独で担当した。看護総合演習Ⅱは，複数の担当教員の一人として担当した。総合実習において，３名の４年生の「看護マネジメント」実習を担当した。４年生の必修科目「卒業研究」３名の研究指導を担当した。科目外の教育活動として，４年生の「看護研究発表会」の準備・運営に担当教員の代表者として携わった。

Ⅱ．研究

１．ストーマ保有者の皮膚障害やストーマ装具交換の自立状況への影響要因

2008年１月から2014年７月までに直腸癌でストーマを造設しストーマ外来を利用した患者の受診状況を調査したデータを分析し，年齢，全身合併症，術式，化学療法の有無，等による皮膚障害やストーマ装具交換の自立状況への影響についての研究成果を国際学会で発表した。

２．オムツ使用者の陰部洗浄におけるノンリンスタイプ洗浄剤と泡状洗浄剤使用の影響

微温湯による陰部洗浄を行っているＡ県内の特別養護老人ホーム入所者15名を対象に，その陰部洗浄のおけるノンリンスタイプ洗浄剤・泡状洗浄剤の使用が肌状態の改善に有用であるか評価した。同時に陰部洗浄の担当者使用者を対象に入所者の皮膚の変化や洗浄方法に関する質問紙調査を実施すること，ならびに考察に共同研究者として協力した。その成果を学会で報告した。

「点検・評価」

1．教育

学部の教育として，前期1年生の必修科目「情報科学」は，初めての担当科目だったので，前年度担当した教員に諸々情報を収集して，独自の教材も加えて実施した。特に学内のインターネット情報ネットワークに入る方法や慈恵メールの活用など知識が足りず，60名の学生が実施できるように支援するのは大きな負担を伴った。学生もPCの扱いや文書並びに表作成ソフト等の技術に格差が大きく，個別に対応が必要だったが，十分な個別指導ができず，時間を要した。教学委員会に教員一人での対応が困難である旨伝えた。

「看護マネジメント」は，居眠りや私語などを防止する意味でも，グループ演習を増やした。それでも，興味を持たせるのは困難だったが，筆記試験の結果は比較的良かった。

「看護情報管理論」の演習では，前年度扱わなかったピポットテーブルを授業内容に組み込んだ。ほとんどの学生がピポットテーブルを使えるようになった。しかしながら，χ二乗検定やt検定など簡単な統計学的な分析は，理解が困難で，自力で実施できるものは半分にも満たなかった。次年度からの新カリキュラムではこの科目が無くなり，学習の機会が少なくなって，地域保健で使う基本的な統計知識が得られる機会が一層減少することで，国家試験等への悪影響が出ることが心配である。

2．研究

ストーマ保有者の研究の分析を進め，英文学術誌の掲載に向けて，論文作成を試みたが，年度内に投稿し，査読対応はしたが，掲載にまでは至らなかった。論文作成と学会誌への投稿，ならびに研究費の獲得が課題である。

研　究　業　績

Ⅲ．学会発表

1）Nagano M, Ogata Y, Ikeda M, Tsukada K, Tokunaga K, Iida S. Risk factors associated with an ostomy from rectal cancer based on independence in changing ostomy appliances and peristomal irritant dermatitis. Wound Ostomy Continence Nursing Society's 49th Annual Conference. Salt Lake City, May.

2）岡田　忍，早坂美祐，小川俊子，西尾淳子，山元ひろみ，青山史絵，宮澤　清，谷戸克己，永野みどり．オムツ使用者の陰部洗浄におけるノンリンスタイプ洗浄剤と泡状洗浄剤使用の影響．第26回日本創傷・オストミー・失禁管理学会学術集会．千葉，6月．

3）石井里美，星理津子，永野みどり．看護における救急支援病床導入の効果. 第14回慈恵看護研究会. 東京，3月.

Ⅳ．著　　書

1）永野みどり．第2部：医療依存度の高い療養者と家族への援助　第8章：褥瘡ケア．渡辺裕子（元家族ケア研究所）監修，上野まり（湘南医療大），中村順子（秋田大），本田彰子（東京医科歯科大），炭谷靖子（富山福祉短期大）編. 家族看護を基盤とした在宅看護論Ⅱ：実践編．第4版．東京：日本看護協会出版，2018. p.132-48.

2）永野みどり．第Ⅱ章：人材の育成と活用　論点2：効率的な人材の活用　A．人材の活用と組織デザイン．井部俊子（聖路加国際大），中西睦子（元国際医療福祉大）監修，手島　恵（千葉大）編．看護管理学習テキスト　第4巻：看護における人的資源. 第2版(2017年度刷)．東京：日本看護協会出版会，2017．p.75-86.

成人看護学

教　授：佐藤　正美	がん看護学，緩和ケア
准教授：望月　留加	がん看護学，緩和ケア，家族看護
准教授：福田美和子	クリティカルケア看護学，急性期看護学，周手術期看護学
講　師：細川　　舞	がん看護学，がん化学療法看護，緩和ケア
講　師：室岡　陽子	周手術期看護学，リハビリテーション看護学，クリティカルケア
講　師：大坂和可子	周手術期看護学，がん看護学，看護情報学

教育・研究概要

学部教育としては，概論および健康レベルに応じた4つの臨床看護学（慢性期・周手術期・がん・急性期）を学内で教授し，慢性期および周手術期看護学実習では看護実践能力をとして習得するプロセスを重視した教育を実践した。研究においては，がん看護学分野および急性・重症患者看護学分野において，各自の専門性に依拠した継続したテーマを追究した。

Ⅰ．教育

成人看護学においては，対象理解に基づいた問題解決的思考を育成するために看護過程の展開を重視した教育を展開している。クリティカルシンキング能力育成を目的にして成人看護学の教員全員で担当する「成人看護実践論」では昨年度の方法をさらにブラッシュアップし，４年生の実習が行われている時期のため，協力体制のもと充実した授業となるよう，前半と後半にワークが集中するよう工夫した。よりリアリティのあるシチュエーションで思考できるように工夫し，ケースの情報を紙面だけではなく，独自に製作したビデオ教材を今年度も活用して情報を収集し，看護計画を立案しロールプレイを取り入れて実践するワークを進めた。授業方法は，従来通りグループ学習を基盤としたPBLの方法をとりいれた。効果的なグループ活動も期待する授業であるため，学修評価にはグループメンバーの貢献度についてピア評価を取り入れた。学生による授業評価は概ね肯定的であったが，前半と後半で間が２か月近く空いたため，前半の学修を想起しにくく学修継続の視点から困難な点があった。

実習環境・体制整備においては，成人看護学を担当する教員として急性期・慢性期の担当を偏らずに実習指導できるよう実習グループ担当教員の調整に取り組んだ。今後さらに前進させることで，成人看護学の教員として学生の学修を深め継続的に学びを支援する体制づくりができ，さらに教員の教育力を高めることができると考える。また臨地においては，臨床実習指導者との振り返りをさらに強化し連携を進めた。看護実践能力を獲得するためには，実習経験を学生自身が意味づけ，主体的に学習することが重要である。学生は，教員が臨床の場に居て適宜振り返りをする，記録を基に看護過程展開に対するヒントを出す，ともに実践する，安全を確保する，などの教育的介入に対して概ね肯定的に評価をしていた。これらは継続したい点であり，今後も関係者と役割分担を調整し，相互作用をしながら適切な実習指導が期待される。

Ⅱ．研究

１．がん患者の看護に関する研究

１）直腸がん前方切除術後患者の排便障害を軽減する看護支援に関する研究

前方切除術後に特徴的な排便障害を軽減する看護方法の開発を進めている。本年度は，結腸がん切除術後患者と直腸がん前方切除術後患者を対象に調査し，「排便障害評価尺度 ver.2」の併存的妥当性および識別的妥当性を確認でき学会で発表した。

２）がん化学療法に伴う末梢神経障害に関する研究

多施設との共同研究として，がん化学療法に伴う末梢神経障害の支援アプリケーションの開発を進めている。本年度は開発したアプリケーションを広く周知するためにホームページの開設を行った。さらに，そのホームページの周知のための広報活動を行った。

３）子育て中のがん患者の支援に関する研究

本研究の目的は，治療を受ける子育て世代のがん患者が抱える気がかりに対するアセスメントツール，及びアプリケーションを開発し，評価指標に基づくITを活用した包括的ケアモデルの開発を行うことである。本年度は文献検討により現状の課題を明らかにした。

４）無菌室に入室する白血病患者への支援に関する研究

臨床看護師との共同研究として，無菌室に入室する白血病患者が抱いている思いに関する調査を行った。その結果，医療者への思い，感じている苦痛への思い，抱えているニーズが明らかになった。本課題は日本造血細胞移植学会で公表した。

２．急性・重症患者の看護に関する研究

１）クリティカルケア看護実践力サポートプログラムの開発に関する研究

クリティカルケアが展開される場で勤務する看護師に対し，看護実践力サポートプログラムを構築した。看護実践力サポートプログラムの内容は，グループリフレクションとシミュレーションをセットにしたものとした。本研究で設定したプログラムを評価し，パターン認識の組み換えと再構築が促進し，メタ認知を高めることにもつながることが考えられた。

３．その他に関する研究

１）意思決定支援ツールの質を評価する国際基準の日本語版開発

International Patient Decision Aids Standards（IDPAS）Collaborationでは，意思決定支援ツールであるディシジョンエイドの質を，開発過程および共有意思決定に基づくデザインになっているかという視点から評価する国際基準を開発している。大坂と他大学研究メンバーで，この国際基準（バージョン４）の日本語版開発をBeatonの提示した５つのステップを基に行い，和訳への翻訳と逆翻訳を実施した。IDPASに申請の後，インターネットで最終版を公開した。

2）在宅療養者の褥瘡予防のための汎用型血流改善ミニシートの研究開発

回復期病棟に入院し日常的に車いすを使用する患者を対象に，ミニシート使用における接触部体圧と血流の変化について現在データ収集中である。今後はデータを分析し，褥瘡予防効果について検証する予定である。

「点検・評価」

教育においては，成人看護学の教員全員で担当する「成人看護実践論」について話し合いを重ねて進めたが，前期の科目であり新メンバーが加わった中で準備時間が短いこと，同時期に成人看護学実習Ⅱ-2が進んでいることから，授業計画と運営に難渋した。次年度は早い時期からの企画検討が望まれる。引き続き，授業内容の精選および授業方法，評価方法について検討が必要である。実習教育においては，4附属病院との連携や調整はスムーズであり，実習内容・方法は昨年度の評価に基づきさらに発展させることができた。継続して環境調整を行い充実した教育を継続したい。教員体制としては，成人看護学急性期領域の准教授1名が新規に着任，新しいメンバーとなり成人看護学領域全体で協力して教育や組織運営を実施した。

研究においては，多くの教員が外部資金を獲得し，それぞれが積極的に取り組んでいる。今後も研究内容を教育に還元すべく，学会発表および論文発表に尽力するために，領域内で協力し合う風土を継続させて，学内・学外研究者とも協力し，時間や環境のマネジメントをしながら取り組んでいきたい。

研　究　業　績

Ⅰ．原著論文

1）Matsui K[1], Yanagihara K[1], Sato M, Notohara H[1], Shimo A[1], Tsukamoto M[1], Nakamura Y[1], Nishino H[1], Higashi I[1], Hyouda A, Murata N[1], Motohashi M[1], Morita E[1], Yonezawa C[1]（[1] Kanazawa Univ）. Factors associated with a positive attitude to nursing practice of nurses engaged in terminal cancer care. J Wellness Health Care 2017；41(1)：125-35.

2）鈴木久美[1]，大畑美里（聖路加国際病院），林　直子[2]，府川晃子[1]（[1] 大阪医科大），大坂和可子，池口佳子[2]（[2] 聖路加国際大），小松浩子（慶應義塾大）．乳がん早期発見のための乳房セルフケアを促す教育プログラムの効果．日がん看会誌 2018；32：12-22.

Ⅲ．学会発表

1）高島尚美（関東学院大），菊池麻由美，佐藤正美，藤村龍子．（ポスター）看護診断「意思決定葛藤」とクリティカルシンキング（その1）．第23回日本看護診断学会学術大会．京都，7月．［看診断 2017；22(2)：85］

2）菊池麻由美，高島尚美（関東学院大），佐藤正美，藤村龍子．（ポスター）看護診断「意思決定葛藤」とクリティカルシンキング（その2）．第23回日本看護診断学会学術大会．京都，7月．［看診断 2017；22(2)：86］

3）佐藤正美，菊池麻由美，藤村龍子，高島尚美（関東学院大），杉浦なおみ（慶應義塾大），中島智子（佐久大），杉崎一美[1]，小寺直美[1]，吉川尚美[1]（[1] 四日市看護医療大），奥田美香（三重県立総合医療センター），村瀬美有紀[2]，竹内昌代[2]（[2] 鈴鹿中央総合病院），室岡陽子，大坂和可子，務台理恵子，細川　舞．（交流セッションⅣ）看護診断：意思決定葛藤について深く知ろう～それって本当に意思決定葛藤？～．第23回日本看護診断学会学術大会．京都，7月．［看診断 2017；22(2)：20］

4）佐藤正美，務台理恵子，江川安紀子．（口頭）低位前方切除術後症候群を評価する「排便障害評価尺度 ver.2」の妥当性の検討．第37回日本看護科学学会学術集会．仙台，12月．［日看科学会講集 2017;37回：O44-3］

5）佐藤正美．（特別講演）排便障害による生活の影響～こころ・からだ・つながり～．第20回東関東ストーマ・排泄リハビリテーション研究会．つくば，10月．

6）Yanagihara K[1], Sato M, Matsui K[1], Notohara H[1]（[1] Kanazawa Univ）.（Poster）Positive feelings experienced by nurses engaged in terminal-stage cancer care and analysis of related factors. IPOS2017（International Psycho-Oncology Society 19th World Congress of Psycho-Oncology）. Berlin, Aug.

7）福田美和子，岡部春香（東海大），本田多美枝（日本赤十字九州国際看護大），和田美也子（日本赤十字看護大），明神哲也（東京医科大）．（ポスター）2年目になったばかりのクリティカルケア領域に勤務する看護師の実践に対する認識．第37回日本看護科学学会学術集会．仙台，12月．［日看科学会講集 2017；37回：PA-03-1］

8）岡部春香（東海大），福田美和子，明神哲也（東京医科大），和田美也子（日本赤十字看護大），本田多美枝（日本赤十字九州国際看護大）．（ポスター）『クリティカルケア看護実践力サポートプログラム』による影響－第2報－2年目の看護師を対象として－．第37回日本看護科学学会学術集会．仙台，12月．［日看科学会講集 2017；37回：PA-03-2］

9）室岡陽子.（ポスター）A 病院における手術中の褥瘡発生状況と関連要因の分析. 第 26 回日本創傷・オストミー・失禁管理学会学術集会. 千葉, 6 月.［日創傷オストミー失禁管理会誌 2017；21(2)：218］

10）Osaka W, Nakayama K（St. Luke's Int Univ).（Poster）Process evaluation of a decision aid with patient narratives regarding surgery choice among women with breast cancer. 9th International Shared Decision Making Conference（ISDM 2017). Lyon, July.

11）Fujita M[1], Osaka W, Yonekura Y[1], Nakayama K[1]（[1] St. Luke's Int Univ).（Poster）Evaluation of patient information leaflets in Japanese clinical research with reference to decision quality. 9th International Shared Decision Making Conference（ISDM 2017). Lyon, July.

Ⅳ．著　　書

1）中山和弘（聖路加国際大), 大坂和可子. 第 4 章：意思決定支援ツール（ディシジョンエイド）の作成・活用. 中山健夫（京都大）編著. これから始める！シェアード・ディシジョンメイキング. 東京：日本医事新報社, 2017. p.80-91.

老年看護学

教　授：梶井　文子　　老年看護学
准教授：草地　潤子　　老年看護学

教育・研究概要

Ⅰ．学部教育

老年看護学の学部教育は, 2012 年度の改正カリキュラムによる実習内容が変更に伴い, 超高齢社会ならびに地域包括ケアシステムの構築といった新しい保健・医療・福祉システムの中での高齢者への多様な看護支援の理解できることをねらいとしてきた。さらに 2017 年度からは, 2015 年度からの変更の上に看護学科ディプロマポリシーを意識した新カリキュラム編成に基づく科目構成となり, 地域の医療機関, 高齢者施設, 自宅に在住する高齢者の多様な健康課題をもつ高齢者への看護支援ならびに地域・保健医療福祉に関わる多職種連携を学習するために必要な知識の理解を強化するように以下の各科目内容を構成した。特に新カリキュラム科目編成となった学年は 1 年次である。

1．老年看護学概論

1 年次前期の老年看護学概論では, 加齢に伴う心身の生理的変化および社会環境の変化が高齢者の生活に与える影響, 高齢者看護における人権擁護と倫理問題, 我が国の高齢者政策の現状と課題について考え, 学生が自身の意見や考えを他者に述べることができるような教育方法を検討し, また高齢者の疑似体験や実際の大学周辺の地域に在住する高齢者との交流等の演習を通じて, 健康な高齢者の理解を深めるように教授した。

2．老年看護対象論

2 年次後期の老年看護対象論では, 老年期の人々に多くみられる症状（低栄養, 摂食・嚥下機能の低下, 認知症, せん妄・うつ, 骨・関節疾患, 転倒, 失禁等）を中心とし, その看護アセスメントについて理解し, 演習を通じて高齢者の自立支援・介護予防に向けた看護実践を教授した。

3．老年看護方法論

3 年次前期の老年看護方法論では, 高齢者に特有の健康障害と周手術期・回復期・慢性期における治療とそれに伴う反応を理解し, 症状に適した実践方法や, 高齢者およびその家族を対象とした基本的援助方法について, リハビリテーション期にある脳梗塞の患者の看護過程を展開する演習を通じて教授した。

4．臨地実習

1）老年看護学実習Ⅰ

3 年次後期の老年看護学実習Ⅰでは, 脳血管疾患や運動器疾患等の障害をもつ 1 名の高齢患者を受け持ち, 術後の急性状況およびリハビリ期における身体・精神・社会面の特性を理解し, 退院後の自立支援に向けたリハビリテーションを生かした看護過程を実践し, 関連の多職種連携におけるチーム医療, 看護職の役割について教授した。

2）老年看護学実習Ⅱ

障害を抱えながら, 地域で生活する高齢者とその家族の特性を理解し, 地域の保健・医療・福祉サービス機関と連携しながら, 高齢者が地域で生活し続けるための継続看護を実践するための能力と態度を養うため, 4 年次前期に介護老人保健施設, 認知症対応共同生活介護, 地域包括支援センター, 居宅介護支援事業所での実習を通して地域医療福祉における多職種連携と看護職の役割について教授した。

3）総合実習（継続看護コース）

4 年次後期の継続看護コースでは, 慢性疾患等をもちながら在宅で生活する高齢者の受診の背景（要因）や, 医療機関の救急外来を含む外来受診時の, 心身・社会的な状況, 看護の役割や各外来の専門性のある看護実践を理解することを教授した。

Ⅱ．研究

領域内で取り組んでいる研究活動は，以下の５つである。

１．高齢者の在宅継続転倒予防プログラムと検知・支援モニタリング方法の開発と評価（科学研究費補助金・基盤研究Ｂ・2017 年度）

転倒検知アプリケーションの装備したスマートフォンを用いた介入研究の対照群の調査を行った。地域の 65 歳以上の高齢者を対象とした「シニアのための転倒予防講座」を隔週３回実施し，講座の初回時，初回時から３ヵ月後，６ヵ月後の心身の健康状態（BMI，筋肉量，骨密度，握力，開眼片足立ち時間，10M 歩行時間，MMSE，GDS 等）や保健行動（運動頻度，社会活動）に関するデータを収集した。2017 年度の対象者は，16 名であった。現在分析中である。

２．地域在住の認知症者と家族介護者の支援を担う潜在看護職の育成・教育プログラムの開発（科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究・2017 年度）

2016年度に郵送調査として，潜在看護職における，地域で生活する認知症の人と家族介護者の看護支援への関心，認知症の人と家族支援に必要な学習ニーズ，ワークライフバランスを考慮した支援活動に対する希望，今後の活動の場，ならびに収入等の育成に必要な課題の結果から，潜在看護職が認知症の人と家族を支援するための教育プログラムの内容を作成した。潜在看護職と就業中の看護師の背景や職業経験の違いを分析し，発表を行った。

３．第三病院地域連携型認知症疾患医療センター主催の「認知症市民講座」参加者の認知症疾患医療センター対するニーズについて，自記式質問紙調査を実施し，134 名の回答者のデータを分析した。その結果，「認知症の介護・ケアに関する情報提供」104 名（76.5％），「認知症の特有な行動への対応方法を含む知識提供」96 名（70.6％），「認知症の疾患やケア方法の啓発情報の提供」92 名（67.6％），「地域で認知症を診療する病院・クリニック等の情報提供」86 名（63.2％）の順に多かった。「認知症や物忘れに対する心配の程度」が強い者ほど，「医師による認知症の診断や治療等に関する個別相談」p＝0.029，「認知症診断後の看護師による介護等への個別相談」p＝0.020 が有意に高かった。以上の結果から，ホームページ等で情報公開を充実していくことや，地域の市との連携によって，医師や看護師による認知症・物忘れに対する心配のある者への個別相談などの細やかなサービス提供の必要性が高いことがわかった。この結果は，東京慈恵会医科大学雑誌での公表を行っていく予定である。（看護学科研究費・2017 年度）

４．食行動関連障害のあるレビー小体型認知症高齢者の在宅ケアモデルの検討（科学研究費補助金・基盤研究Ｃ・2017 年度）

実質的な調査が進んでいないが，文献検討や共同研究者からの提言によって研究方法の練り直しをすることができた。参加観察によるデータ収集を行うために研究協力していただける訪問看護ステーションの開拓中である。

「点検・評価」

１．教育

学部教育である老年看護学の関連授業・実習においては，2016 年度の評価を踏まえて，さらに授業と実習が連動できるように，学生が老年看護学で必要とする看護技術の学習を深められるように授業内容・演習内容を改善することができた。

２．研究

研究活動については，領域構成員がそれぞれに研究テーマを持ち積極的に研究を遂行している。外部の競争的資金である科学研究費補助金による２研究を昨年度に継続し，１研究は新規獲得して，外部の分担研究者と共に実施できている。また看護学科研究費による研究も継続できている。各研究の多くが現在データを分析中であるため，今後は，これらの分析結果を，学会発表ならびに論文にて公開していく必要がある。

研　究　業　績

Ⅲ．学会発表

1）千吉良綾子，梶井文子，草地潤子，永澤成人，新野直明（桜美林大），福川康之[1)]，小野口航[1)]（[1] 早稲田大），櫻井尚子，中山恭秀，小沼宗大.（ポスター）地域在住高齢者の多因子介入転倒予防プログラム受講後の変化　第１報～24 週間の転倒の有無と心身状況・保健行動との関連～．日本転倒予防学会第４回学術集会．盛岡，10 月．［日転倒予会誌 2017；4(2)：125］

2）永澤成人，梶井文子，草地潤子，千吉良綾子，新野直明（桜美林大），福川康之[1)]，小野口航[1)]（[1] 早稲田大），櫻井尚子，中山恭秀，小沼宗大.（ポスター）地域在住高齢者の多因子介入転倒予防プログラム受講後の変化　第２報～24 週間の筋肉量，歩行・バランス能力，握力に関する分析～．日本転倒予防学会第４回学術集会．盛岡，10 月．［日転倒予会誌 2017；

4(2)：125]
3）永澤成人.（ポスター）「検体測定室」継続利用による HbA1c と保健行動への影響. 第 22 回日本糖尿病教育・看護学会学術集会. 福岡, 9 月.［日糖尿教会誌 2017；21(特別号)：152］
4）Kajii F.（Poster）Actual conditions and correlates of employment for working and retired nurses in Japan. TNMC & WANS International Nursing Research Conference 2017. Bangkok, Aug.
5）菊池麻由美, 草地潤子.（ポスター）看護職者の経験を記述した現象学的看護研究についての文献検討. 第 37 回日本看護科学学会学術集会. 仙台, 12 月.［日看科会講集 2017；37 回：PB-43-5］
6）遠山寛子, 石川純子, 佐竹澄子, 高橋　衣, 梶井文子, 北　素子.（ポスター）主体的学修態度を育てるコンピューター試験の在り方の評価（第 1 報）－試験準備周知方法の変化－. 日本看護学教育学会第 27 回学術集会. 宜野湾, 8 月.［日看教会誌 2017；27：139］
7）石川純子, 佐竹澄子, 遠山寛子, 高橋　衣, 梶井文子, 望月留加, 北　素子.（ポスター）主体的学修態度を育てるコンピューター試験の在り方の評価（第 2 報）－学年別平均得点率と知識定着度の分析－. 日本看護学教育学会第 27 回学術集会. 宜野湾, 8 月.［日看教会誌 2017；27：139］
8）梶井文子.（ポスター）施設高齢者のエンド・オブ・ライフにおける栄養ケア・マネジメントのチームアプローチ構造とケアプロセス. 日本エンドオブライフケア学会第 1 回学術集会. 東京, 9 月.［日本エンドオブライフケア学会第 1 回学術集会講演集 2017；B3-01］
9）高瀬義昌（たかせクリニック）, 斎健太郎（ソフィア訪問看護ステーション城南）, 梶井文子.（シンポジウム：地域の人々の命と生活を他職種と護る～食べる力を支える～）. 第 29 回日本看護学校協議会学会. 東京, 8 月.

Ⅳ. 著　　書

1）梶井文子. 11. コミュニケーションの重要性. 河田光博（京都府立医科大）, 小澤一史（日本医科大）, 渋谷まさと（女子栄養大）編. 医療概論；栄養科学シリーズ NEXT. 東京：講談社サイエンティフィク, 2017. p.125-35.
2）梶井文子. 第 1 章：高齢者の理解　B. 加齢による身体的側面の変化, C. 加齢による心理・社会的側面の変化, D. 高齢者と発達課題, 第 5 章：高齢者の病態・疾患と看護　A. 高齢者に多い疾患とその特徴, B. 系統別にみる症状・疾患と看護 1 ～ 5. 六角僚子（獨協医科大）著者代表. 新看護学 13：老年看護. 第 6 版. 東京：医学書院, 2018. p.6-13, 100-24.
3）梶井文子. 第 5 章　高齢者看護の実践　2. 高齢期のフレイルの予防と看護　A. 生活の自立を進め, 行動範囲を広げる看護, D. 低栄養の予防と看護. 亀井智子（聖路加国際大）, 小玉敏江（日本アビリティーズ協会）編. 高齢者看護学. 第 3 版. 東京：中央法規出版, 2018. p.194-6, 214-21.

Ⅴ. そ の 他

1）梶井文子, 北　素子, 嶋澤順子, 望月留加, 菊池麻由美, 佐竹澄子, 遠山寛子, 石川純子, 久保善子, 永吉美智枝.【ICT を活用した新しい看護教育】教育現場での ICT 活用事例　学生の主体的学習能力獲得を支援する「electronic-portfolio システム」を活用した看護教育. 看展望 2017；42(13)：1228-34.

精神看護学

教　授：小谷野康子　　精神看護学
講　師：石川　純子　　精神看護学

教育・研究概要

Ⅰ. 教育

精神看護学の授業は, 学年進行とともに概論, 対象論, 方法論, 領域実習, 総合実習が専門科目として設定されている。概論では, 脳と様々な精神機能, 心の構造と働き, 心の発達理論を紹介しつつ, ライフサイクルにおける精神保健上の問題, 地域における精神保健活動, 災害とこころ, メンタルヘルスの保持とその方法等, 精神保健を中心とした講義を行った。授業後半では精神医療の歴史と人権擁護とともに関連法規について学修した。講義に加え防衛機制のレポートを課すことにより知識の定着を図った。東日本大震災における被災者のこころの闘いについては, 実録視聴覚教材を用いて惨事ストレスのトラウマティックな体験が如何にこころに打撃を与えたかについて学修した。

精神看護対象論では, 精神医学講座の医師が代表的な精神疾患の原因, 症状, 薬効, 副作用を専門家の視点から解説した。その後, 看護師の視点, 当事者の視点から疾患を抱えた生活を捉え直し具体的な看護問題を考察する授業を行った。また, 精神科医療の特徴的な視点を重視し, 看護師自身のメンタルケア, 家族ケア, 地域での生活援助等, 他の領域との連携について考察する機会を多く設けた。また, 精神看護方法論では, 精神保健福祉法を基本法として行われる現在の日本の精神医療・精神看護につい

て，対象者の行動制限のとらえ方，支援の在り方についてクリティカルな視点で考察する能力を育てることをめざした。e-ラーニングシステムの活用を試み，学生が主体的に学習できるような仕掛けづくりに心がけ，授業外学習を活かしながら具体的な看護の展開方法について学修した。

精神看護学実習では，精神科単科病院２病院で２週間の実習を行った。それぞれが専門病院であり慢性期閉鎖病棟，スーパー救急閉鎖病棟での実習となり，専門性の高い学修となった。実習期間の中での半日は第三病院の森田療法センターで，本学の代表的な神経症治療の場の見学実習を実施した。

総合実習の２週間は，福祉的支援の場の精神障害者を対象とする地域事業所と医療的支援の場である精神科病院の２か所で実習を行った。地域での１週間は就労支援Ｂ型事業所（クラブハウス）で当事者と活動をともにし，ミーティングにも参加した。地域で暮らす精神障害者の居場所であり，活動の場であり，就労機能のある当該事業所での実習により障害を持ちながらも支援を受けながら地域で生活する精神障害者への福祉的支援について，看護職と精神保健福祉士との多職種連携を考える機会となった。病棟の１週間は,急性期閉鎖病棟で患者を受け持ち，看護過程を展開しつつ，看護師とともに看護業務のシャドーイングを実施した。多重課題を学内での最終カンファレンスでは，精神障害者の地域移行と看護の役割についてパワーポイントを用いて発表会を実施した。

Ⅱ．研究

精神看護学での研究活動を以下に示す。

１．感情調節困難患者を対象とした弁証法的行動療法スキル訓練のプロトコル開発と有用性（小谷野康子，科学研究費補助金・基盤研究（C）・2017 年度）

先行研究から継続中の弁証法的行動療法のスキルトレーニングによる患者の変化について継続してプログラムに参加している患者にインタビューを実施し，継続比較分析を実施して介入法を検討した。加えて患者配布資料の作成と実施者用プロトコルを開発することを目的とした。５名にインタビューを実施して４名について分析中である。

２．知的障害を伴わない青年・成人期自閉症スペクトラム者への支援困難感の質的分析（小谷野康子，順天堂精神医学研究所研究助成・2017 年度）

精神科デイケア等のスタッフ 141 名を対象に，ASD 支援者の困難感について自記式質問紙調査を実施した。自由記述の分析で新たに明らかになった困難感の内容は，支援者側の知識不足からもたらされる「障害特性理解」,「具体的な対応方法」,「個別支援計画」の課題であった。また，対象者の障害特性から,「課題解決に向けての困難感」を支援者が感じていることが明らかになった。

「点検・評価」

１．教育

精神看護学の授業はいずれもDP5の「倫理的姿勢」を涵養する科目である。授業開始の冒頭で DP5 を保障する科目であることを学生に意識づけるとともに，これらの達成を強化する授業内容にする必要がある。レポートの重みづけの検討や自身で問題を発見できるような課題設定を検討したい。

また，学生が主体的に学べる学習環境の工夫や仕掛けづくりについては更なる工夫が必要であり，e-ポートフォリオ，e-ラーニングといった既存のシステムを活用しながら今後も検討していく。今まで活用できていなかったナーシングスキル等のシステムも有効に活用できるよう,加えて検討していきたい。

２．研究

外部資金の獲得，学科内研究費の獲得により研究が進行中である。研究は分析中のものもあるが，論文として誌上発表できるように準備をしていきたい。また，精神科医療に関連した施設における共同研究も継続的に行い，大学と臨床との連携，多職種連携による地域貢献などにも引き続き注力していきたい。

研　究　業　績

Ⅰ．原著論文

1）Koyano Y, Mori M（Natl Coll Nursing）. Effectiveness of non-comprehensive interventions using a dialectical behavior therapy skills training -analysis of a case of psychological trauma caused by abuse-. 順天堂精神医学研究所紀要 2017；28：98-102.

2）宮津多美子（順天堂大），小谷野康子，石橋和代（青山学院大）. 欧米の少女誘拐・長期監禁事件サバイバーのレジリエンス　ナラティヴ分析を中心に．医療看研 2017；13(2)：33-41.

Ⅲ．学会発表

1）渡辺浩美（了徳寺大），小谷野康子．自閉症スペクトラム支援専門職向け TEACCH-based Program の有用性の検討－インタビュー調査の結果を通して－．日本精神保健看護学会第 27 回学術集会・総会．札幌,

6月.［日精保健看会抄集 2017；27回：189］

2）Koyano Y, Watanabe H（Ryotokuji Univ), Difficulties associated with the support for autism spectrum disorders（ASD). Sigma Theta Tau International's 28th International Nursing Research Congress. Dublin, July.［Sigma Theta Tau International Nursing Research Congress 2017；12］

3）渡辺浩美（了徳寺大），小谷野康子．自閉症スペクトラム支援専門職向けTEACCH-based Programの評価. 第37回日本看護科学学会学術集会. 仙台，10月.［日看科学会講集 2017；37回：PB-08-7］

4）Ishikawa J, Oka M（Gunma Univ), Hyodo T（Eijin Dialysis Clin). Conducting research on dialysis patient satisfaction for five factors in Japan. World Congress on Nursing & Nurse Education. Rome, Sept.［Proceeding of World Congress on Nursing & Nurse Education Euro Nursing 2017；41］

5）遠山寛子，石川純子，佐竹澄子，高橋　衣，梶井文子，北　素子.（ポスター）主体的学修態度を育てるコンピューター試験の在り方の評価（第1報）－試験準備周知方法の変化－．日本看護学教育学会第27回学術集会．宜野湾，8月.［日看教会誌 2017；27：139］

6）石川純子，佐竹澄子，遠山寛子，高橋　衣，梶井文子，望月留加，北　素子.（ポスター）主体的学修態度を育てるコンピューター試験の在り方の評価（第2報）－学年別平均得点率と知識定着度の分析－．日本看護学教育学会第27回学術集会．宜野湾，8月.［日看教会誌 2017；27：139］

7）石川純子，佐々木愛[1)]，塩月玲奈（中山病院），西山晃好[1)]（[1] 吉祥寺病院）．我が国における非自発入院に関する研究の動向と今後の課題．第25回日本精神科救急学会学術総会．金沢，11月.［日精救急会抄集 2017；25回：112］

小児看護学

教　授：高橋　　衣　　小児看護学
講　師：永吉美智枝　　小児看護学

教育・研究概要

学部教育では，概論および方法論・演習を学内講義とし，小児病棟・小児外来・総合母子健康医療センター・NICU・GCU・通園（所）支援施設実習で小児看護実践能力を習得し教育評価を行った。特に，日常的な臨床場面での子どもの権利擁護の実践を高めるための教育方法・学生が主体的に技術演習に取り組むための教育方法を検討した。また，4年生総合実習（小児臨床看護コース）では，家族とのパートナーシップに基づく24時間を通した子どもと家族の支援や成長発達を促進する看護を実践し，地域連携と保健医療福祉チーム一員としての多職種における看護師の役割を習得した。

研究では，子どもの権利擁護に関する研究，慢性疾病をもつ子どもと家族・親子の関係性に関する研究，発達障害児に関する研究に取り組んでいる。

Ⅰ．小児看護に携わる看護師の子どもの権利擁護実践能力尺度の開発：信頼性・妥当性の検証

小児看護に携わる看護師の子どもの権利擁護実践能力を高める一助として「小児看護に携わる看護師の子どもの権利擁護実践能力尺度」を開発し，その信頼性と妥当性の検証を行った。第1段階は小児看護に携わる看護師の子どもの権利擁護実践能力尺度案の作成，第2段階は尺度案の内容妥当性の検討，第3段階はパイロットテストを行った。最終的に尺度案19項目を因子選定条件に従って検討した結果，3因子を採用した第1因子【子どもと家族を理解しようとする関わり】，第2因子【子どもの権利を擁護していない医療スタッフとの調整】，第3因子【子どもへの説明と意思の確認】とした。Cronbach's α 係数は0.86，既存尺度との相関も確認され，基準関連妥当性・既知集団妥当性からも小児看護に携わる看護師の子どもの権利擁護実践能力尺度として一定の信頼性と妥当性を有すると考えられた。しかしながら累積寄与率は43.25％であったため，さらに尺度項目の検討を継続していく必要性がある。

日本小児看護学会第28回学術集会で発表予定である。

Ⅱ．Related visual impairment to mother-infant interaction and development in infants with bilateral retinoblastoma

網膜芽細胞腫（RB）をもつ1歳児とその母親の母子相互作用の特徴，1歳児の発達特性と母親が感じる育児ストレスについてリスク要因の関連探索を目的に18組の両眼性RBをもつ1歳児と母親を対象に，乳幼児の発達と行動，母子相互作用，母親の育児ストレスについて横断的に統計学的解析を行った。乳幼児の発達指数（DQ）と乳幼児期行動チェックリスト改訂版の両方でハイリスクを示した5名がJNCATSの6項目で通過率0％を示した。DQ＜70未満の乳幼児は，日本版育児ストレスインデックスの“子どもの機嫌の悪さ”，“子どもが期待通りにいかない”，“親につきまとう／子どもに慣れにくい”

でハイリスクを示す確率が有意に高かった(p<.05)。母親の身振り表情の変化に対して乳幼児の発達特性に合わせた支援の必要性が示唆された。

Eur J Oncol Nurs 2017；28：28-34 に掲載された。

Ⅲ．現在の小児医療における患者家族滞在施設（ハウス）に対するニーズの検討

日本におけるハウスの運営および患児と家族の滞在状況から，ハウス利用に対するニーズの実態を把握し，連携への示唆を得ることを目的に，調査1では，患者家族滞在施設ネットワークに登録されている75団体124施設を対象に質問紙調査を実施し，統計学的解析を行った。53施設を分析対象とした。医療機器を装着した患児の滞在の受け入れを経験したハウスは58.49%（n＝31），その設置形態は38.71%（n＝12）が宿泊施設専用型，29.03%（n＝9）がマンション型の順に多かった。医療機器の種類は，患児を受け入れたハウスの41.51%（n＝22）が在宅酸素，18.87%（n＝10）が人工呼吸器，7.55%（n＝4）が腹膜透析，5.66%（n＝3）が補助人工心臓，3.77%（n＝2）が点滴と回答した。患児本人の滞在目的は併設型群では外出55.6%，外泊55.6%，リハビリ44.4%の順に高いのに対し，非併設型群では外泊82.6%，外来経過観察69.6%，外来通院治療65.2%の順に高かった。非併設型群は，常勤スタッフがいる団体が56.5%（p<.05），ボランティアがいる団体が82.6%と有意に高かった（p<.005）。在宅で使用可能な医療機器がハウス内で使用されていることから，在宅移行前など中間施設として患児の滞在へのニーズが示された。調査3では，小児医療に携わる医療従事者におけるハウスの認知度及びニーズの実態を明らかにし，ハウスにおける支援のあり方や病院との連携方法への示唆を得ることを目的に，全国142の小児専門病院，特定機能病院，総合・地域周産期母子医療センター，がん診療連携拠点病院の小児科，NICU，GCU，産科などに勤務する医療従事者を対象に質問紙調査を実施した。451名（97.83%）がハウスを「とても必要だと思う」または「必要だと思う」と回答し，「遠方からの長期入院となり，患児が入院している間の家族の滞在先」を必要とした事例を68.55%（n＝316）が経験していた。在宅療養に向けて，医療処置の取り扱い訓練のため，患児・家族の滞在先が必要でハウスを紹介したのは31.21%（n＝54）であった。病院とハウスの連携の体制づくりの必要性が示唆された。本研究結果は，2017年日本小児看護学会第27回学術集会での3演題の発表およびテーマセッションを実施した。本研究は2016年度日本財団助成金により実施した。

Ⅳ．障がい児通所支援施設実習による看護学生の発達障がい児イメージの変容

障がい児通所支援施設実習を通して看護学生の発達障がい児に対するイメージの変化とその関連要因を明らかにすることを目的に，看護学生を対象としたアンケート調査と統計解析を行った。調査の結果，実習前後のイメージ得点の比較では「明るい－暗い」（p<.01）等36項目中32項目で有意差がみられ，実習を通して看護学生は発達障がい児イメージを変化させることが示唆された。また，実習後の関りへの自信と対象属性でχ二乗検定を行ったところ，実習が楽しかったと答えた学生で有意(p<.01)となり，実習での経験を楽しいと感じた看護学生は発達障がい児と関わる自信をより高くもつことが示唆された。

「点検・評価」

教育では，新カリキュラムにおいて子どもの権利擁護・成長発達・健康増進，Family centered care の中心概念であるパートナーシップを重視した4年間の系統的な教育方法および内容を検討する。また，看護研究では，学生が研究的な思考で子どもの現状を考察する方法，技術の習得と臨床へ還元する視点をもてる教育を行う。

研究では，それぞれの教員が取り組んでいる研究において明らかになった課題を基に，継続的に追及していく。また，附属病院との共同研究を推進していく。さらに，外部研究資金の獲得および研究に取り組み，学部教育・現任教育・小児看護への還元を目指す。

研　究　業　績

Ⅰ．原著論文

1）Nagayoshi M, Hirose T, Touju K, Suzuki S, Okamitsu M, Teramoto T, Omori T, Kawamura A, Takeo N. Related visual impairment to mother-infant interaction and development in infants with bilateral retinoblastoma. Eur J Oncol Nurs 2017；28：28-34.

Ⅲ．学会発表

1）遠山寛子，石川純子，佐竹澄子，高橋　衣，梶井文子，北　素子.（ポスター）主体的学修態度を育てるコンピューター試験の在り方の評価（第1報）－試験準備周知方法の変化－．日本看護学教育学会第27回学術集会．宜野湾，8月.［日看教会誌 2017；27：

139]
2）石川純子，佐竹澄子，遠山寛子，高橋　衣，梶井文子，望月留加，北　素子．（ポスター）主体的学修態度を育てるコンピューター試験の在り方の評価（第2報）－学年別平均得点率と知識定着度の分析－．日本看護学教育学会第27回学術集会．宜野湾，8月．［日看教会誌 2017；27：139］
3）瀧田浩平，永吉美智枝，高橋　衣，矢郷哲志，江口八千代，小山健太．慢性疾病をもつ患児と家族のための患者家族滞在施設に対するニーズ　第1報～医療機関併設型と非併設型の利用状況の比較～．日本小児看護学会第27回学術集会．京都，8月．
4）永吉美智枝，瀧田浩平，高橋　衣，矢郷哲志，江口八千代，小山健太．患者家族滞在施設における利用状況からみたニーズの検討　第2報～医療機器を装着した患児への滞在支援～．日本小児看護学会第27回学術集会．京都，8月．
5）矢郷哲志，江口八千代，永吉美智枝，瀧田浩平，植田洋子，小山健太．小児医療に携わる医療従事者における患者家族滞在施設の認知度およびニーズ．日本小児看護学会第27回学術集会．京都，8月．
6）永吉美智枝，廣瀬幸美．網膜芽細胞腫の治療を終えた幼児後期にある子どもをもつ母親の育児ストレス．第15回日本小児がん看護学会学術総会．松山，11月．

V．その他

1）高橋　衣．東京慈恵会医科大学医学部看護学科における臨床倫理教育：医学科との共修倫理教育を中心に．生命と倫理 2017；4：19-35.
2）高橋　衣．【小児看護における看護研究】臨床研究における倫理　小児の臨床における看護研究の倫理．小児看護 2017；40(10)：1243-51.
3）ファミリーハウス編．慢性疾病をもつ子どもと家族のための患者家族滞在施設の役割：現在の小児医療における運営者・家族・医療従事者のニーズと支援に関する全国調査から（現在の小児医療における患者家族滞在施設に対するニーズの検討と理想のハウス実現に向けた基盤の構築事業報告書）．東京：ファミリーハウス，2017.
4）永吉美智枝．治療環境が変化する中での患児・家族の現状とニーズ．病気の子ども医療教 2017；23：98-130.
5）梶井文子，北　素子，嶋澤順子，望月留加，菊池麻由美，佐竹澄子，遠山寛子，石川純子，久保善子，永吉美智枝．【ICTを活用した新しい看護教育】教育現場でのICT活用事例　学生の主体的学習能力獲得を支援する「electronic-portfolioシステム」を活用した看護教育．看展望 2017；42(13)：1228-34.

母性看護学

教　授：細坂　泰子　　育児支援，母乳育児，周産期ケア，
講　師：濱田真由美　　授乳支援，社会規範，経験

教育・研究概要

母性看護学領域では，母性看護学概論・周産期看護方法論ⅠおよびⅡの講義・演習科目を経て，看護実践能力と課題解決能力を習得するプロセスを重視した教育を実践した。研究においては，女性のライフスタイル各期における様々な健康問題について研究し，研究員各自の専門性に依拠したテーマでの探索を行った。

Ⅰ．学部教育

母性看護学における学部教育は2017年度の新カリキュラム改訂に伴い，母性看護学概論の授業内容変更と看護対象論内でのライフサイクルからみた母性看護学の教授法が新たに加わった。4年間を通してDP2の課題解決能力の育成に焦点をあて，同時にDP3のパートナーシップやDP5の倫理的姿勢の修得を図った。

母性看護学概論では，性と生殖に関する基本的な知識に加え，母性看護を実践する上での多様な思考力を養うことを科目のねらいとした。科目は講義，討議およびディベートで教授した。周産期看護方法論Ⅰでは，妊娠・分娩期における対象の身体的・心理的・社会的変化と生活への適応やその看護ケアの学習を科目のねらいとした。科目は講義，演習，個人ワークで教授した。周産期看護方法論Ⅱでは，産褥期における対象の身体的・心理的・社会的変化と生活への適応および新生児期の生理的特徴について学び，母子を中心とした家族への援助を学ぶことを科目のねらいとした。科目は講義，演習，個人・グループワークで教授した。また2年次必修の演習科目として行われる家族看護論では，家族看護学に必要な様々な理論や技法を学ぶことで，健康な家族のあり方について学ぶことを科目のねらいとした。これらの授業を経た上で，臨地実習での実践を行った。

母性看護学実習では，妊娠・分娩・産褥期および新生児期を中心とした母性看護学の対象者とその家族に対し，看護過程を展開するための基礎的実践能力を養うことをねらいとした。産科外来での妊婦健診やハイリスク新生児室での見学実習，産婦・褥婦とその新生児を受け持つウェルネス看護過程を展開

する病棟実習を通して，母性看護学で必要な看護支援について教授した。また総合実習では特に将来，助産師養成課程に進学する意志のある学生を対象に，母性看護学実習で学ぶ内容にハイリスクの対象者や分娩時の看護ケアを追加して教授した。

Ⅱ．研究

当該年度に領域内で取り組んだ主な研究活動は以下の６つである。

１．育児支援における４コママンガの活用：しつけと虐待の境界に焦点を当てて

しつけと虐待に関する知識の普及と対応を描写した４コママンガのパンフレットが，母親および母親の支援者の知覚にどう反映され，育児支援につながるかを検討することを目的とした。乳幼児を養育する母親16名と母親の支援者10名を対象に質的内容分析を行った。４コママンガと自己の経験から生じる知覚として，母親からは【しつけと虐待の境界への理解】，【育児経験への共感】，【母親を取り巻く環境と支援の重要性】，【今後に望む育児支援】の４つのカテゴリーが抽出された。支援者からは【妻に対する理解といたわりの知覚】，【責任を自覚しつつ育児を遠巻きに眺める】，【今後に望む育児支援】の３つのカテゴリーが抽出された。

２．日本語版 Quality Assessment Tool for Quantitative Studies（J-QAT）の翻訳の等価性および翻訳妥当性の検討

本研究は量的研究を研究の質の観点から総合的に評価する尺度「Quality Assessment Tool」の日本語版（J-QAT）を作成し，そのプロセスを明らかにしたものである。尺度翻訳にはバックトランスレーション法を用いた。J-QAT は利便性を鑑みチャート形式で作成した。完成版の J-QAT は母性領域をテーマにレビューを行った。現在，翻訳妥当性について検討中である。

３．20年以上仕事を継続してきた女性労働者の働き続ける力

本研究は女性労働者が20年以上仕事を継続し，ライフイベントや就業上の様々な困難に対処し乗り越え，今も名を働き続ける力を明らかにする事を目的とした。45～55歳の正規雇用女性労働者20名を対象に半構成的面接を行い，質的帰納的に分析した。結果から，仕事を継続する為の基盤となるもの，仕事の継続を推進する意志と調整力，仕事を継続して見える景色の３つの側面が導かれた。

４．授乳を行う母親の体験：質的研究のメタ・サマリー

本研究は授乳を行う母親の体験を網羅的に明らかにすることを目的とした。母乳育児に関する論文が激増した2000年以降に日本で発表された質的研究結果40件をメタ・サマリーにより統合した。授乳を行う母親の体験は，30の結果に要約され，９トピックに分類された。そのなかで，母乳育児や搾乳に伴う身体的・精神的苦痛が最も多く現れた。また，母親にとって母乳育児は母子関係よりもむしろ，母親としての価値に結びついた体験であった。現在，投稿中（査読中）である。

５．未受診妊婦に対する受診行動支援モデルの構築

本研究は，妊娠中未受診にて出産に至った入院中の褥婦に対し，未受診に至った経緯，その背景について分析し，未受診という行動と妊婦の背景との関連性，妊娠中に求められる支援について明らかにし，未受診妊婦が受診行動を起こすために活用できる支援体制システムの検討を目的とした。現在，対象者にインタビュー調査を実施中である。

６．日本における母乳育児関連要因についての文献検討

日本では母乳育児を希望する母親は98％にも関わらず，産後１ヶ月時の母乳育児率は50％を切る。それらの要因について文献検討を行い，看護実践と看護の課題について明らかにした。正期産児，NICU入院児ともに，母体要因，新生児要因，母乳育児ケアの３つが関連していた。正期産児は育児支援，NICU入院児はNICUケアと搾乳が特徴的な関連要因となることが明らかになった。

「点検・評価」

学部教育では今年度授業内容の変更があり，教授法など新しい試みを行った。授業評価では評価を得られていたが，教授内容のさらなる理解を深めるためにも，今後も授業内容や教授法の見直し，実習での指導のあり方など，検討を深めていく必要がある。

研究活動については，各研究員が異なるテーマを選択することで母性看護領域の中で幅のある研究活動を実践できた。また各研究員が競争的資金を保有もしくは申請することができた。今後は研究の実践だけでなく，研究の公表にむけて研究を遂行していく課題がある。

研　究　業　績

Ⅰ．原著論文

1）細坂泰子，茅島江子（秀明大）．乳幼児を養育する母親のしつけと虐待の境界の様相．日看科会誌 2017；37：1-9.

Ⅲ．学会発表

1）高田早苗[1)]，川原由佳里[1)]（[1] 日本赤十字看護大），小板橋喜久代（京都橘大），大森純子（東北大），佐藤和佳子（山形大），吉田澄恵（千葉大），濱田真由美．（交流集会３）看護学学術用語の検討－2011 年版の改訂に向けて．第 37 回日本看護科学学会学術集会．仙台，12 月.

地域看護学

教　授：嶋澤　順子　　地域看護学
講　師：久保　善子　　地域看護学
講　師：清水由美子　　地域看護学

教育・研究概要

教育に関しては 2012 年度入学生から保健師教育が選択制となり，実習体系も大きく変化したため，実習地との連携を強化して実習指導にあたっている。また，効果的な実習につなげる準備教育として，３年次の公衆衛生看護活動論においては近隣自治会の協力を得て，地域のキーパーソンへのインタビューや高齢者宅への家庭訪問，地区診断を演習に組み込んだ。

地域看護学では，教員が各々に３つの研究テーマについて取り組んでいる。１つ目は，独立型訪問看護ステーション看護師による在宅精神障害者地域生活支援モデル開発に関する研究である。在宅精神障害者の地域生活支援においてますます重視される訪問看護の機能を明らかにすることを目指し，多様な地域にある独立型訪問看護ステーションでの調査結果を整理し公表のための準備を進めている。また，継続研究として，独立型訪問看護ステーションによる退院直後集中支援に焦点をあてた支援モデル開発に関する研究に着手した。２つ目は，ストレスチェック制度における産業看護職のコンピテンシーに着目し，質的に研究を進めている。また，産業看護職のキャリアアンカーや仕事・家庭の満足度に焦点を当てた調査を実施し，分析を行った。３つ目は，地域で生活している血液透析患者の保健・福祉に関する研究である。今年度は患者会と透析医会と協働し，全国調査を実施した。

また，第三病院との共同研究では，前年度からの継続課題として結核患者の服薬および生活管理に対する入院中の指導の効果について調査，分析した結果を，学内の研究会で報告した。さらに，血液浄化部と外来維持透析患者の自己管理支援をテーマとした共同研究を新たに開始し，調査の実施に向けた検討を行った。

「点検・評価」

教育に関しては，保健師教育課程の選択学生が受講する公衆衛生看護学関連の科目・実習内容の検討を進めてきたのに対し，実習指導者からも一定の評価を得ているが，今後，教育評価研究につなげていきたいと考える。

各研究については，整理した調査データを調査対象者にフィードバックし，さらに各学会でその成果を発表した。今後も，外部研究資金の活用および応募を積極的に行い，研究継続を推進する予定である。また，第三病院との共同研究については，その調査結果を学内の研究会で報告した。

研　究　業　績

Ⅰ．原著論文

1）嶋澤順子，大澤真奈美（群馬県立県民健康科学大），久保善子．独立型訪問看護ステーション看護師による精神障害者地域生活継続への支援内容．社医研 2018；35(1)：63-71.

2）Kubo Y, Hatono Y（Kyushu Univ), Kubo T（Natl Inst Occupational Safety Health), Shimamoto S（Tokai Univ), Nakatani J（Univ Occupational Environmental Health). Relationship between career anchors and demographic characteristics among occupational health nurses in Japan. International Journal of Occupational Health and Public Health Nursing 2017; 4(2) : 27-43.

3）Sugisawa H（J. F. Oberlin Univ), Shimizu Y, Kumagai T（Osaka City Univ), Sugisaki H（Hachioji Azumacho Clin), Ohira S（Sapporo Kita Clin), Shinoda T（Kawakita General Hosp). Earthquake preparedness among Japanese hemodialysis patients in prefectures heavily damaged by the 2011 Great East Japan Earthquake. Ther Apher Dial 2017; 21(4) : 334-44.

Ⅲ．学会発表

1）牛尾裕子[1)]，塩見美抄[1)]（[1] 兵庫県立大），嶋澤順子，山崎洋子（山梨大）．公衆衛生看護の教育方法 「地区活動」を映像化して伝える．第５回日本公衆衛生看護学会学術集会．仙台，2017 年１月.

2）久保善子, 中谷淳子（産業医科大）. 産業看護職のキャリアアンカーと属性および仕事・家庭の満足度との関連. 日本産業看護学会第6回学術集会. 東京, 11月.
3）山下奈々[1)], 山浦明日香[1)], 森田哲也[1)]（[1] リコー）, 久保善子. 事務機製造業における海外駐在員の生活習慣と海外生活の満足度の調査. 第90回日本産業衛生学会. 東京, 5月.［産業衛誌 2017；59(臨時増刊号)：514］
4）清水由美子, 杉原陽子（首都大学東京）, 杉澤秀博（桜美林大）, 小池友佳子（神奈川県立保健福祉大）. 要支援認定者のヘルスリテラシーと周囲からの情報支援との関連. 第76回日本公衆衛生学会総会. 鹿児島, 10月.

Ⅳ. 著　書

1）清水由美子. 第1章：社会・生活基盤と健康, 第2章：家族の機能やライフスタイルの変化, 第10章：保健活動の基盤となる方や施策, 第11章：生活者の健康増進. テコム編集委員会編, 柳澤裕之, 佐藤冨美子（東北大）, 福本正勝（長岡福祉協会）, 石井美智子（i・OH研究所）編集協力. みるみるナーシング：健康支援と社会保障制度　2018-2019. 東京：テコム, 2017. p.2-8, 20-7, 166-200.
2）清水由美子. 第1章：高齢者の生活　1. 高齢者の保健医療福祉に関する制度の変遷　1）医療制度, 2）保健・福祉制度, 3）介護保険制度, 4）訪問看護制度. 亀井智子（聖路加国際大）. 小玉敏江（日本アビリティーズ協会）編. 高齢者看護学. 第3版. 東京：中央法規出版, 2018. p.49-66.

Ⅴ. そ の 他

1）久保善子. 日本人は“働き過ぎ”？！その実態と問題に迫る（第11回）　過重労働対策における産業看護職の役割. 安全と健康 2017；68(11)：76-7.
2）梶井文子, 北　素子, 嶋澤順子, 望月留加, 菊池麻由美, 佐竹澄子, 遠山寛子, 石川純子, 久保善子, 永吉美智枝. 【ICTを活用した新しい看護教育】教育現場でのICT活用事例　学生の主体的学習能力獲得を支援する「electronic-portfolioシステム」を活用した看護教育. 看展望 2017；42(13)：1228-34.

在宅看護学

教　授：北　　素子　　在宅看護学
講　師：遠山　寛子　　在宅看護学
講　師：杉山　友理　　在宅看護学

教育・研究概要

在宅看護学では学部教育として, 2011年度より, 在宅看護学概論から演習型授業での在宅看護援助論, 在宅看護学実習という一連の学習過程において, 在宅看護の特徴を踏まえた看護過程の展開能力修得に重点をおいている。2018年度に, その教育評価研究を実施する予定である。また, 各教員の関心テーマに沿った次に挙げる研究を進めている。

Ⅰ. 急性期病院における認知症高齢者ケースの退院支援プロセス構築の研究

近年, 認知症を有する高齢者が他の疾患の治療を目的として急性期病院に入院する機会が増えているが, その退院支援は困難ケースに挙げられる。認知症特有の困難性に対応した退院支援モデルを開発するため, 急性期病院の退院支援部門の看護師が関わる認知症高齢者の退院支援プロセスを明らかにすることを目的として, 複数ケーススタディ法を用いた研究に取り組んでいる。2017年度は手術目的で10日以上の入院を予定する8ケースの分析から, 軽度～中等度の認知障害のある患者は, 予定通りの入院期間で治療を終え, 退院し, 身体疾患による症状の改善とともに自宅でのADLを拡大しており, 認知症専門職チーム介入の有効性が確認された。

Ⅱ. 訪問看護師, 家族介護者と在宅診療医が活用できる情報共有のためのアプリ開発

在宅療養の現場では, 訪問時に適切なケア提供をするためには訪問看護師と在宅診療医のみならず, 家族との情報共有は療養者を訪問時にアセスメントする際にきわめて重要である。そこで, 3者間で共通して活用できるWEBアプリを開発中である。今後は, これらを実際に活用し, その有用性を確認していく予定である。

Ⅲ. 複数の訪問看護事業所を利用する小児の訪問看護事業連携モデル開発

在宅で生活する医療的ケアを必要とする小児は増加しており, 合わせて小児の訪問看護の需要も増えている。しかしながら小児を対象とした訪問看護を実施できる事業所と看護師は限られている現状にある。訪問看護事業所は小規模が多いことから, 小規模訪問看護事業所が連携し合うことにより在宅で療養する小児やその家族に対する支援体制強化が可能となると考える。そこで, 複数の訪問看護事業所を利用する小児の訪問看護事業所モデル開発を行う研究に取り組んでいる。

「点検・評価」

在宅看護学では，一連の学習過程で積極的にアクティブラーニングを取り入れるとともに，ICT を活用した教育に取り組んでいる。継続的に教育評価を行い，その効果を確認しながら授業改善に取り組んでいく必要がある。特に，2017 年度新カリキュラムが始まったことから，これまでの教育効果を検証しておくことが重要である。来年度はその検証に取り組むことを予定する。各教員が取り組んでいる研究は，いずれも在宅看護学領域では重要なテーマであり，領域内でサポートしあい，さらに発展的に取り組んでいくとともに，研究成果を論文化し，広く公表していくことが課題である。

研　究　業　績

Ⅰ．原著論文

1）Kita M, Yoshida R. Research trends into support for families coping with dementia in Japan. International Journal of Studies in Nursing 2017；2(1), 15–22.

Ⅱ．総　　説

1）北　素子，杉山友理.【訪問看護におけるリスクマネジメント　療養者・家族・医療者の安全をどう確保するか】（第 3 章）療養上の世話におけるリスクマネジメント　誤嚥・窒息・誤飲. 看技 2017；63(5)：466–9.

2）北　素子，杉山友理.【訪問看護におけるリスクマネジメント　療養者・家族・医療者の安全をどう確保するか】（第 3 章）療養上の世話におけるリスクマネジメント　入浴に関する事故. 看技 2017；63(5)：470–3.

3）杉山友理，北　素子.【訪問看護におけるリスクマネジメント　療養者・家族・医療者の安全をどう確保するか】（第 3 章）療養上の世話におけるリスクマネジメント　排泄に関する事故. 看技 2017；63(5)；474–7.

Ⅲ．学会発表

1）遠山寛子，石川純子，佐竹澄子，高橋　衣，梶井文子，北　素子.（ポスター）主体的学修態度を育てるコンピューター試験の在り方の評価（第 1 報）－試験準備周知方法の変化－. 日本看護学教育学会第 27 回学術集会. 宜野湾，8 月.［日看教会誌 2017；27：139］

2）石川純子，佐竹澄子，遠山寛子，高橋　衣，梶井文子，望月留加，北　素子.（ポスター）主体的学修態度を育てるコンピューター試験の在り方の評価（第 2 報）－学年別平均得点率と知識定着度の分析－. 日本看護学教育学会第 27 回学術集会. 宜野湾，8 月.［日看教会誌 2017；27：139］

3）Kita M, Asakura M, Akama M, Uchikoba A, Shinagawa S, Toyama H, Sugiyama Y. The process from admission to discharge of elderly individuals with dementia in acute care hospitals : in case of scheduled admission. BIT's 5th Annual World Congress of Geriatric and Gerontology 2017. Fukuoka, Dec.